報　告

第１５回国際土壌科学会議（World Congress of Soil Science)印象記

北海道大学農学部作物栄養学講座
大崎満

第１５回国際土壌科学会議がメキシコのアカプルコの国際会議場で７月１０日より１６日まで開催された。President はメキシコのチャピンゴ農業大学（中南米最大の農業大学で中南米各国から研究者が集っている）土壌学研究室のA. A. Santeliesで、メキシコが中心になって中南米各国が協力して進められた。従って、シンポジュウムの内容も中南米の農業研究紹介という側面が強かった。少なくとも私が聞いた範囲では、中南米の農業を知るには良い機会であったが、学問的には見る（聞く）べきものは少なかった。むしろ、ポスターセッションに優れたものが多かった。前回の京都大会と比べるからであろうか、会の運営、シンポの内容等かなり見劣りし、国が変わると内容までかくも変わりうるものかと驚かされた。少なくとも、最先端の分子生物学などでは、開催国によりシンポの内容、質までがそう大きく変わるとは考えにくい。農業研究は奥が深いというか、底が浅いというか、まことに魑魅魍魎としたものであると知らされた。

この会は土壌科学会議であるから、文句を言う筋でもないのだが、前回の京都大会に比べて植物栄養関係が大幅に減少（事実上皆無）したのが残念である。京都大会で、日本より植物栄養関係のセッションを設けるよう強い要望が出されたが否決されたいきさつがある。残念ながら、国際的には土壌学と植物栄養学は今後分離して進むことになると思われる。ちなみに、植物栄養関係では、Plant Nutrition Colloquium（１９９７年東京開催）と Genetic Aspects and Molecular Biology of Plant Nutritionがあり、将来合体することも検討されている。

ラテンアメリカ農業以外のもう一つのトピックはSustainable Agricultureで、シンポ４３題中９題にものぼった。このうち幾つかを聞きつつ、ただ単にこれまでのテーマにSustainable を付しただけの粗末な議論に思われた。何を持ってSustainable とするのかを明確に議論しない限り、あらゆるものがSustainable に言い換え可能であり、従ってそのような特別な研究など存在しないことになる。少なくともSustainableを論じる以上、土壌のみに固執するのはかえって奇妙である。ヨーロッパ系の土壌学者が植物を排除しようとする不見識は土壌学そのものを矮小化したという意味でも残念な会議であった。少なくとも、Sustainable Agriculture（Ecosystem）は土壌、植物（作物、森林）、生態、地球化学・物理、経済等を含めて広く議論すべきもので、個々の学会でこれらを取り上げるのはそもそもあまり意味が無いのかもしれない。頑固な連中を相手にするより、新たに組織を編成した方が効率的かつ有意義であるかもしれぬ。

以上、植物栄養という立場からは大いに失望させられた会議であった。但し、それは私が勝手に失望しただけであって、本来あるべき土壌会議そのものについて述べるのは私の任ではないことを明記しておく。本来その内容を詳細に紹介すべきであるが、このような次第で気が重いので、駄文の感想に換えさせていただいた。